

メキシコで感染者が1000人を超え、米国へも国境を越えて猛威を振るう豚インフルエンザが、世界保健機関(WHO)により、新型インフルエンザと認定され、警戒度もフェーズ5と宣言され、日本政府は国内侵入を食い止める水際対策が実施されています。今回の新型インフルエンザは、従来東南アジア発生し、人への感染が懸念されていた強毒性のH5N1型鳥インフルエンザではなく、日本ではあまり知られていない豚インフルエンザが人への集団感染が起き、人の病気として定着、感染する勢いです。

豚インフルエンザは、Aソ連型と同じ型のウイルスとされています。1930年に米アイオワ州で見つかり、76、88年に米国で小規模な流行が報告され、1918年に世界で4000万人以上が死亡したスペイン風邪から発生したと考えられています。スペイン風邪は日本でも猛威を振っており、岸田國士の「風邪一束」というエッセイにも「実際、風邪くらゐで大騒ぎをする必要はないといふしりから、風邪がもつて死んだといふ話をして聞かせる奴がある。

尤もかの流行性感冒といふ曲者は、近時、「スペインかぜ」なる怪しくも美しい名を翳(かざ)して文明国の都市を襲ひ、あつと云ふ間に、幾多の母や、夫や、愛人や、子供や、女中の命を奪つて行つた。同じ死神でもと虎列刺(これら)や、黒死病(ペスト)と違ひ、インフルエンザといへば、なんとなく、その手は、細く白く、薄紗を透して幽かな宝石の光りをさへ感ぜしめるではないか。

私も先年「恐ろしい風邪」を引いて、危く一命を墜とさうとした。

ふらつと旅に出た、その旅先のことで、海岸の夕風に小半時間肌をさらしたのが原因だった。それが、たまたま、さして懇意などいふでもないA氏の家で、三日間発熱四十度を下らないといふ始末なのである。そのまゝ、H博士の病院へ運ばれて、肺炎ときまり……その後は話すにも及ばないが、此の時の風邪で思ひ出すのは、そのA氏 画家にして詩人なるA氏の素人医学である。彼は自ら原始人を以て任じてゐるが、実は、近代的感受性と一種の唯物観とが極度にその生活を支配する趣味的ボヘミアンの典型である。自ら帆走船を作り、フレムを工夫し、浴室を建て、マムシ酒を醸造し、家族の病気を診断し、手製の体温器を挟ませ、同じく手製のハカリを以て投薬し平然として快復を信じてゐる。」という行があります。

当時は、今ほど情報も医学も進んでいない時代。世間ではかなり乱暴な治療が行われていたようで、ひょっとして、岸田國士の肺炎もスペイン風邪によって引き起こされた可能性が高いと思われます。

新型インフルエンザに感染している疑いがあった横浜市男子高校生の件で、厚生労働大臣の「危機管理の体をなしていない。こういう時は上に立つ者がリーダーシップを発揮しなければ」との横浜市長らを批判した発言が飛び出し、横浜市長の「今日は大臣に振り

<スペインかぜ>

1918年から翌19年にかけて、全世界的に流行したインフルエンザで、記録にある限り人類が遭遇した最初のインフルエンザの大流行（パンデミック）である。

発生源は1918年3月米国シカゴ付近。高病原性を獲得したのは1918年8月15日頃、アフリカ西海岸の英国保護領シエラレオネの首都フリータウン付近とされる。

米国発であるにもかかわらずスペインかぜと呼ぶのは情報がスペイン発であったためである。

感染者は6億人、死者は4000万から1億人に及び、当時の世界人口は18億人であったと言われているため、全人類の約3割がスペインかぜに感染したことになる。

日本では当時の人口5500万人に対し39万人（当時の内務省は39万人と発表した）、最新の研究では48万人に達していたと推定されている）が死亡した。

日本での流行による死亡者の中には代表的な例では元内務大臣末松謙澄、東京駅の設計を担当した辰野金吾、劇作家の島村抱月、西郷隆盛の従兄弟大山巖夫人で女子教育者の大山捨松、皇族の竹田宮恒久王、西郷の息子で軍人の西郷寅太郎などの著名人も含まれている。



スペイン風邪の患者でごった返すアメリカ軍の野戦病院



1918年の全員、マスクをしているシアトル警察



スペイン風邪のポスター

春秋：「新型インフルエンザ」(4/27)

第1次世界大戦中、スペインかぜと呼ばれる新型インフルエンザが世界で流行した。死者数は4000万人ともいわれ、日本でも東京駅の設計で知られる辰野金吾らが命を落とした。最新の広辞苑はこの病を「1918年スペインから起こり世界各国に広まったインフルエンザ」と解説する。

しかし実は、流行の発端は米国だったと今では考えられている。米軍の進軍とともに欧州に運ばれ、世界へと広がった。なぜスペインの名がついたのか。主要国は自国の弱みを知られまいと病の情報を伏せた。中立国だったスペインでは大流行が比較的自由に報道されたため、思わぬ汚名を着せられたのだという。

戦争で経済が混乱し、栄養や衛生の状態が悪かったことも流行を加速した。戦闘中に病で命を落とした兵士も多かったようだが、死者の数すらはっきりしないまま長い年月が過ぎた。アラスカの凍土に埋葬されていた遺体を掘り起こしウイルスを抽出するなど、正体を突き止める研究が進んだのはここ10年ほどだ。

日本での死者は当時の内務省の統計では約39万人とされていたが、ごく最近、実は約48万人だったとの新たな推計が出た。情報公開、平和、貧困の撲滅。新たな病に人類社会が対抗するには、こうしたことも大事になる。ウイルスは進化した。ヒトはどうか。

<辰野金吾 (1854-1919)>

建築家。工部大学校(のちの帝国大学工科大学、現在の東京大学工学部)卒。工学博士。肥前国(現在の佐賀県)唐津藩下級藩士の生まれ。

1880年(明治13年)英国留学、バージェスの事務所やロンドン大学で学び、1883年(明治16年)に帰国。工部大学校教授、帝国大学工科大学教授、帝国大学工科大学学長を歴任。



1902年(明治35年)工科大学を辞し、1903年(明治36年)葛西萬司と辰野葛西事務所(東京)を、1905年(明治38年)片岡安と辰野片岡事務所を開設(大阪)。

国会議事堂(議院建築)の建設をめぐり、建築設計競技(コンペ)の開催を主張、1919年(大正8年)国会議事堂の設計競技で審査員を務める。

工科大学本館・日本銀行本店・浜寺公園駅・国技館などを設計し、その設計の頑丈さから「辰野堅固」と呼ばれた。

天声人語：「パンデミック」(4/28)

大正の中期、スペイン風邪が世界で猛威をふるった。文学者島村抱月の急逝はよく知られるが、歌人の与謝野晶子も一家で感染した。子どもが小学校でうつされて家族に広まったようだ。

晶子は「感冒の床から」という一文を新聞に寄せる。学校や興行など人の集まる場所の閉鎖で後手に回った政府の対応を突いた。年をまたいで暴れた新型インフルエンザは、国内だけで48万人ともいう命を奪った。

当時の内務省の記録には「パンデミック（世界的大流行）」の言葉がすでにある。その最悪の事態に、メキシコや米国の豚インフルエンザは至るのか。世界が神経をとがらす中で死者は増えつつある。

分かれ目は、毒性の強さと、人から人に感染するかだという。そうなれば怖い。去年の「リーマン・ショック」を思い出す。グローバル時代、対岸の火事にも見えた炎は、たちまち同時不況となって世界を包んだ。スペイン風邪の昔に比べて地球はぐっと狭くなっている。

世界保健機関（WHO）は引き続き警戒レベルを検討しているそうだ。上げれば往来や物流に支障が出て、経済などを損ないかねない。とはいえ後手に回れば恐ろしいダメージを世界に与えてしまう。左右の崖（がけ）を覗（のぞ）きながらの厳しい判断なのだろう。

今のところ我々には「冷静に」が呪文となろう。情報公開を求めながら情報にあわて、パンデミックより先にパニックに絡め取られてはつまらない。今回逃れても、いずれ来る未知との闘いである。試されるのは、個々の対応を含めた国の総合力だと胸に留めたい。

< 島村抱月 (1871-1918) >

旧姓は佐々山、幼名は瀧太郎。文芸評論家、演出家、劇作家、小説家、詩人。島根県小国村（現浜田市）生まれ。東京専門学校（早稲田大学）卒。

「早稲田文学」記者、読売新聞社会部主任を経て母校文学部講師、1902年から1905年まで、早稲田の海外留学生として英独留学。帰国後早稲田大学文学部教授となり「早稲田文学」を主宰して自然主義運動のために活躍。



1906年に坪内逍遙とともに文芸協会を設立したが、松井須磨子との恋愛スキャンダルが起り、文芸協会を脱退。松井とともに芸術座を結成、トルストイの小説を基に抱月が脚色した「復活」（1914年）の舞台が評判になり、各地で興行、松井が歌う劇中歌「カチューシャの唄」が大ヒット曲となる。

主な作品に戯曲『運命の丘』、小説『白あらし』『山恋ひ』、詩歌『心の影』などがある。

< 与謝野晶子 (1878-194) >

歌人、作家。大阪府堺市（現在の堺区）出身。堺女学校（現・大阪府立泉陽高等学校）卒。20歳ごろより和歌を投稿、浪華青年文学会に参加。

明治 33 年（1900 年）の歌会で歌人・与謝野鉄幹と親しくなり、鉄幹が創立した新詩社の機関誌『明星』に短歌を発表。翌年東京に移り、処女歌集『みだれ髪』を刊行。後に鉄幹と結婚。



明治 37 年（1904 年）『君死にたまふことなかれ』を『明星』に発表。明治 44 年（1911 年）史上初の女性文芸誌『青鞥』創刊号に詩を寄稿。

明治 45 年（1912 年）『新訳源氏物語』の序文を書いた鷗外の援助で、第一回目のパリ訪問、その後 4 ヶ月間、イギリス、ベルギー、ドイツ、オーストリア、オランダなどを歴訪。

帰国 2 年後、鉄幹との共著『巴里より』で「要求すべき正当な第一の権利は教育の自由である。」と、女性教育の必要性などを説く。

その他『全訳源氏物語』『蜻蛉日記』『女人創造 叢書 女性論』『私の生ひ立ち』など多数。

編集手帳：「少し人間より強いもの」(4/29)

主人の苦沙弥(くしゃみ)先生が猫の写生をしている。尿意を催した猫が座を立ちかけるや、先生は「この馬鹿(ばか)野郎」と怒鳴(どな)りつけた。夏目漱石「吾輩(わがはい)は猫である」に、猫の独白がある。

少し人間より強いものが出て来ていじめてやらなくてはこの先どこまで増長するか分からないと。枯れ葉をお札に化けさせるような現代版の錬金術でつまづく国があったり、核とミサイルを独裁の道具に利用する国があったり、猫の心配もあながち的はずれではなかったろう。

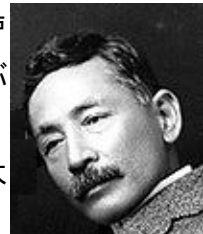
豚インフルエンザがこれまで発生の恐れられていた「新型インフルエンザ」であることを政府が宣言した。

情報は不足している。メキシコでのみ死亡率が高い理由も、症状の詳細もまだ分からない。ウイルスは万国共通の敵である。各国の水際作戦を奏功に導くためにも、すべての国が「人類」というユニホームを着て緊密な情報交換を急がねばならない。

国際連携の大切さは、BSE(牛海綿状脳症)や鳥インフルエンザで学んできた。名前のない猫は知るまいが、人間もいくらかは賢くなっている。少し人間より強いもの の好きにさせるわけにはいかない。

<夏目漱石(1867-1916)>

小説家、評論家、英文学者。俳人(俳号は愚陀仏)。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。



大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学)英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。

余祿：「新型インフルエンザ宣言」(4/29)

インフルエンザの流行と思われる日本最古の記録は平安時代の貞観年間のことという。西暦862年に「たくさんの人が咳逆(がいぎやく)(ひどいせき)を患い、死者多数」と史書にあり、その10年後にも京で大流行する。その時、街ではあるウワサが広がった。それは前年暮れに加賀に来航した渤海(ぼっかい)の使節団がもたらした「異土の毒気」が咳逆の原因だというものだった。当時、渤海との交流がひんばんになっており、人々はインフルエンザが海外から来るらしいことを察知したのである(酒井シヅ著「病が語る日本史」講談社学術文庫)。

インフルエンザは江戸時代の鎖国下でも長崎はじめ、琉球や朝鮮と往来のある薩摩や対馬から全国に広がった。人々はオランダ人やシャムの漂流民や琉球人が持ち込んだなどとウワサした。世界的大流行は鎖国日本も簡単にのみ込んだのだ。

さて世界的大流行に備える警戒レベルが世界保健機関(WHO)によって引き上げられた豚インフルエンザだ。これを受けて日本政府は「新型インフルエンザ」発生を宣言し、国内での感染発生防止にむけた行動計画をスタートさせている。

空港では感染者が出た地域からの到着機に検疫官が乗り込む機内検疫も始まった。ただ対外交流が限られていた時代でも、わずかなすき間から感染を広げたインフルエンザである。どこまで水際で上陸阻止できるかは必ずしも楽観できない。

いずれ国内で感染者が見つかることもありうるが、そこは信頼できる情報やアドバイスを踏まえ冷静に応じたい。免疫のない感染症はその時々社会には最も深刻な試練だが、平安時代このかた踏んだ場数もムダではないはずだ。

<酒井シヅ(1935-)>

静岡県生まれ。三重県立大学医学部卒、東京大学大学院医学研究科修了。医学博士。

順天堂大学医学部教授を経て、現在、同大客員教授、野間科学医学資料館常任理事、日本医史学会常任理事など。

日本の医学史研究の第一人者。医療の歩みを、病気の解明の歴史とのみ捉えるのではなく、自然科学が宗教から医学を分離したさいに置き去りにした、自然への畏敬(いけい)心の安寧の問題にも光をあて、医療の歴史を、「からだの文化史」として取り扱っている。

また、韓国における衛生行政と日本の明治から昭和初期に至るまでの公衆衛生を比較研究。

著書に『日本の医療史』『新装版解体新書』『病が語る日本史』など多数。

